

## 彼岸花の祝福

南部エチオピア牧畜民社会ボラナの幸福の表わし方

田川 玄

日本では九月になると、田圃が彼岸花で赤く縁取られる。まっすぐに伸びた茎に、大きな赤い花がつく。どぎつい赤色だ。花弁の外側へ、細長い雌しべと雄しべが何本も突き出て、ささくれ立っている。

彼岸花には毒がある。そう聞いていたせいか、子供には、形も色も毒々しげに見えた。花の赤い色は恐ろしく、不気味だった。毒をもつ悪い花だ。彼岸花を見つけると、ことごとく蹴り倒した。足先を使い、毒に触れないように注意した。花はたやすく、茎の中程でぽっきりと折れる。折れ口から白い液体が出る。毒に違いない。不安になる。

ボラナの土地では一月に、彼岸花が咲く。ボラナ語で、一月はアブラーサという。彼岸花もまた、アブラーサと呼ばれる。一月は、朝霧の立つ頃だ。しかし、酷暑の大乾季の訪れが迫っている。彼岸花の開花は大乾季の到来を知らせる。ここでは大乾季と大雨季、小乾季と小雨季が一年の間に交互にやってくる。彼岸花は人里ではなく、山の中に咲く。薪を切りに山に入る女性や家畜を放牧させる牧童が花を見つける。夏の終わりの日本で毒々しく見えた花は、乾いた土地の、きつい太陽光線を受け、鮮やかに映える。

ある日、アカシア科の木の下で、村の人々が集まり、話し合いをしていた。そこに、近くで仔ウシの群れを放牧させていた少年が、彼岸花を携え現れた。少しひしゃげた花が、茎の中程で折り取られていた。花は長老の手に渡った。彼は、花に二度ほど、くちづけをした。そして、右目と左目に、右耳と左耳に、再び口に、最後は喉元へ、花をやさしく押し当てた。こうした動作を繰り返しながら、彼は何かを呟いていた。

その日の夕方、件の彼岸花は、ウシ囲いの門柱に挿されていた。村でわたしが「義姉」と呼んでいる女

性に、花のことを尋ねた。「今日、お父さんがアブラーサの花にくちづけしていたんだけど、そのとき何て言ったの」。義姉は笑うと、ウシ囲いの門柱に挿してある花を手に取り、くちづけをした。

妻よ、乳搾りをする妻、家畜も人も、赤ん坊は大きくなれ

ellele elemtuu dhalattu dhala guddisi

老人は長く生き、子供は育て

guddaiya bulchi dhiqqa guddisi

(花を目に押し当て)

目をわたしに開かせてくれ、目はよいものをわたしに見させて

ila naa bani, ila waan dansa naa garsiisi

(花を耳に押し当て)

耳をわたしに開かせて、耳はよいことをわたしに開かせて

gurra naa bani, gurraan waan dansa naa dhageesisi

(再び、くちづけをして)

口はすばらしい話をわたしにさせて

afaani waan dansa naa dubbisi

(喉に花を押し当て)

命(註:「喉」と同音語)は、わたしを生き長らえさせ

lubbu naa bulchi

(お腹に花を押し当て)

ミルクはわたしを満腹にさせ

aanan naa quufsi

(再び、くちづけをして)

この年もあなたに会えた

ka bara kana sii garre

次の年もわたしと見えん

ka bara eegii tana na garsitsi

「何でも書き留めるのね」と彼女は言う、彼岸花をわたしに手渡した。同じようにわたしも祝福の言葉を述べようとするが、途中でつかえてしまった。彼女がゆっくりと言葉の接ぎ穂をしてくれた。やがて、騒々しい鳴き声とともに、ヤギとヒツジの群れが土埃をたて、村に帰ってきた。母ヤギが子供を探して右往左往している。帰牧の時間になると、村は急にあわただしくなる。彼女は赤ん坊のミルクを搾るため、コップを取りに家に戻った。ひとり残されたわたしは、今しがた憶えた祝福の言葉を呟きくちづけをすると、彼岸花をウシ囲いの門柱に挿した。ウシの群れも、じきに戻ってくるにちがいない。

ボラナにおいて、彼岸花は祝福の花である。人々は彼岸花を祝福し、彼岸花からの祝福を乞い願う。彼岸花からの祝福とは、天あるいは神であるワーカの祝福をさす。ウシ囲いの門柱に花を挿すことも、祝福だ。

彼岸花が咲けば、間もなく厳しい大乾季がボラナの土地全体を覆う。約三ヶ月ものあいだ人々は、渴きが過ぎ去り雨が訪れることを、ひたすらに待ちわびる。大乾季に交わされるあいさつに、次のようなものがある。

「大乾季が過ぎて、雨が降ろうとしていますね」

Boona baate rooba geet.

「すでに降ろうとしています」

Ya geete.

渴きは徐々に高まる。それとともに、ミルク入り紅茶を飲み終わった後の、コップの底に残る砂が増えていく。紅茶に入れるミルクの量も次第に減っていき、終いにはいがらっぽい「黒い(buraacha)」紅茶だけとなる。村近くのため池には、「悪い水(bisaan hamo)」とボラナが呼ぶ、赤茶けた泥水が底の方にへばりつく。さらに渴きが最高潮に達すると、ため池はどうとう干上がり、飲み水にも事欠く。女たちは水をもとめて遠くの深井戸へ出かけて

いく。干からびた土地には牧草はない。当分のあいだ、乳ウシと仔ウシを村に残し、牛群と牧童は牧草の残っている土地を求め、移動の暮らしを送る。乳ウシから出るミルクも僅かだ。その僅かなミルクは、幼い子供たちに与えられる。蓄えていたトウモロコシも底をつこうとする。家畜はやせていき、市場での値段は最低となる。トウモロコシを買うためには家畜を売るしかない。また、この季節、いつ家畜が病気になるか死なないとも限らない。わたしの世話になっていた家のウシが三頭、大乾季に口からよだれを出して、あつという間に死んでしまった。体力がなければ、人も家畜も生きることは難しい。

しかし、ボラナにとって、何よりも必要なものは祝福である。祝福の言葉は彼岸花に限らない。日々のあいさつもまた、祝福である(Baxter 1990)。朝起きてから夜寝るまで、人々はその口に祝福の言葉を絶やすことはない。主に1950年代にケニア側のボラナで調査したイギリス人の人類学者バクスターは、「ボラナ社会はときおり、祈りと祝福の川面に漂っているようにおもえる」(Baxter 1978:155)と言い表し、後にこれは「祝福の川」として彼に捧げられた本のタイトルとなっている(Brokensha 1994)。先ほど記した大乾季のあいさつも、祝福なのだ。祝福においては、現実がどうであろうが、望ましいことが実際にそうであるように語られる。

ボラナは、生きるに厳しい大乾季の到来を知らせる彼岸花を、不吉な花とは見なしていない。むしろ彼岸花を祝福し、彼岸花からの祝福を求める。これこそが、この土地で、この厳しい季節を生きるための、「ボラナのやり方(aadaa Borana)」である。

今年、出会った彼岸花に、来年もまた出会うにちがいない。

[注]

ヒガンバナ(彼岸花): 秋に人里近くで、はねあがった形のまっ赤な花をつけて群生する多年草。本州、四国、九州の田畑のあぜや堤防などに生える。中国から伝来して日本で野生化したとされ、東アジアにひろく分布する。

和名は秋の彼岸のころにさくことによる。別名のマンジュシャゲは、葉がでる前に「まず咲く」「真っ先に咲く」の音に、仏教の「曼殊沙華」の文字をあてたという説がある。花茎の高さ30~50cm。葉は線形で長さ30~60cm、質はあつくやわらかい。濃

緑色の葉の中央に白緑色の筋がはいる。9月ごろ、葉よりずっと高く花茎をのばし、赤色の花を数個輪状につける。花被片は6枚でそりかえり、赤色のおしべとめしべが花の外へ長くつきでる。花ののち、葉がでて翌年の春にかれる。

鱗茎は石蒜（せきさん）といい、乾燥したものをすりおろしたものは足のむくみなどにきく。だが、アルカロイドの一種（リコリン）をふくむので、食べると吐き気、下痢をおこす。（マイクロソフト エンカルタ 97 エンサイクロペディア マルチメディア百科事典より"ヒガンバナ" Microsoft(R) Encarta(R) 97 Encyclopedia. (C) 1993-1997 Microsoft Corporation.)

[参考文献]

- Baxter, P.T.W. 1978 "Boran Age-sets and Generation-sets: Gada, a Puzzle or a Maze?", in *Age, Generation and Time: Some Features of East African Age Organisations*, Baxter, P.T.W and Uri Almagor, eds., pp.151-82. C. Hurst & Co. Ltd.: London.
- Baxter, P.T.W. 1990 "Oromo Blessing and Greetings", in *The Creative Communion: African Folk Models of Fertility and the Regeneration of Life*", Jacobson-Wedding, A. and Walter van Beek, eds., pp.235-50. Almqvist & Wiksell International: Stockholm.
- Brokensha, D. ed. 1994 *A River of Blessings: Essays in Honor of Paul Baxter*. Syracuse Univ.: New York.

(たがわけん  
一橋大学大学院社会学研究科)



ミテイスモンキーの子ども。樹上から焼畑耕地に落ちてきた。南西エチオピア、マジヤングルの村で。  
(写真提供：佐藤廉也氏、京都大学)